Osaka University Knowledge Archive

Title	辻邦生初期歴史小説の研究
Author(s)	岡﨑, 昌宏
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49408
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【26】

氏　　名	岡　崎　昌　宏（おか ざき まさ ひろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２２６０７　号
学位授与年月日	平成21年３月24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**辻邦生初期歴史小説の研究**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　荒木　　浩　　教　授　飯倉　洋一

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、作者の自作解説に依拠されがちで固定化されてきたイメージを打破することを目指して、徹底的な読みを通して従来の研究に一石を投じようとするものである。

第一章では、「三部作」とされる歴史小説のうち、「孤独」「歯車」に注目して『安土往還記』を考察した。「尾張の大殿」の生き方考え方の高貴さばかりに注目してきた先行研究とは異なり、語り手「私」からこの小説を考えることによって、「宿命」と戦ってきた「私」の「崩壊」が、現代にも通ずる問題を含んでいることを明らかにする。

第二章では『天草の雅歌』を論じた。自分達ではどうにもならない運命に対し示した態度において、与志とコルネリアには大きな差があることを示した。従来のような、辻に対するイメージにこだわり、与志の「見苦しい」切腹の意味を捉えようとしない研究のあり方を批判した。

第三章では、『嵯峨野明月記』を考えた。「一の声」「二の声」「三の声」の回想を、別々に考察することにより、嵯峨本の制作にはまったく集約されない、それぞれの考えの歩みを明らかにする。

第四章では、第一章から第三章までの考察の結果をふまえ、「三部作」の結びつきを考えた。「三部作」において、「宿命」の問題を中心に捉えうること、舞台がいずれも、死が身近な激動の時期であることなどの共通点を指摘した。

第五章では、『旅の終り』をとりあげ、死という運命を意識したとき、幸福を感じることができるかという「私」の抱える問題を明らかにした。

第六章においては、ただ単純に「穏やかでつつましい生活への共感」というように考えられてきた『サラマンカの手帖から』について、「前から何もかも決っている」（＝運命）という考えを否定し、「自分の軌道」を歩みたいと考える女と、そのように割り切ることができなかった「私」の態度の違いから、運命に対する姿勢を読み取った。

第七章では、旧制高校生時代に辻が書いた『遠い園生』を考察した。語り手「私」の現在の悩みと、「私」が少年時代の回想を通して得たものとを考え、少年期に育まれた性格を「運命」と捉える「私」が陥っている、「どうすることも出来ない」現状を明らかにした。「運命」を自覚した人間の生き方、という問題が、戦後の小説群（歴史小説「三部作」も含めて）につながっていくことを指摘した。

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

申請者は、何よりも従来の研究が自作解説の枠組みを出ていないことにいら立ち、〈高貴な精神〉に回収されてしまう読みを打破しようとした。そして、辻の小説群においては、現代小説、歴史小説を問わず、「運命」にまつわる問題が描かれていることを明らかにし、現代小説と歴史小説の違いを超えたつながりへの展望を見出そうとした。この姿勢自体はすこぶるまっとうなものであり、新たな読みへの誘因となるとも考えられ、十分に評価できるものである。

『天草の雅歌』については、「私」という存在を重視し、新たな読みの地平を提示したと言えるし、『嵯峨野明月記』についても、従来の視座では取り落としてしまう観点を示すなど、積極的に評価できる点は少なくない。『サラマンカの手帖から』についても、新たな枠組みを示すことに成功しているともいえる。これらの論がたたき台となって新たな研究の進展に寄与することにもなろう。

研究の書き換えへの意欲、実際に新たな読みを示した達成については十分に評価するのを躊躇わせるものはない。

しかし、自作解説からの自由は、いわばごく当たり前のことであって、従来の論がその域を脱していないことをもって、それらの論をただひっくり返しただけでは、豊穣な論へたどり着くことはできまい。自作解説に逆に拘束されることもあり得るであろう。スリリングな読みだと思わせるような個所も多いとは言えまい。

辻邦生という作家の全貌をどうとらえているのかということも含め、独りよがりではない説得力のある考察の積み重ねをさらに探求する必要がある。「三部作」なるものになぜこだわらなければならないのかということについても十全の説明がなされているとはいえない。歴史小説という規定についても、中途半端と言わざるを得ず、従来の既定の枠を抜け

出せてはいない。

また、「ある意味」などという表現の多用は、明確な説明を回避しているとも言われかねないところがある。一層の注意が望まれる。

このように、要望するところも少なくないが、研究者人口が多いとはいえないこの領域で、従来の辻邦生研究に一石を投じたことは疑いなく、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。